

3. 市民活動・地域活動の活性化部会

I 課題の把握

「市民活動・地域活動」に関する課題について、様々な角度から意見を出し合い、検討しました。

- ・ 事務量が多く事務局の負担が大きい
- ・ 会場（活動の場）の確保が難しい
- ・ 高齢化が進んで活動の担い手が減っている

活動団体への運営支援

- ・ 中学生に参加を呼びかけたらどうか？
- ・ 担い手の育成とどう活かすのかが問題
- ・ 地域へ活動を案内するコーディネーターが必要
- ・ 学んだ技術や特技を生かせるとよい

地域人材の育成と人材活用

- ・ ボランティア活動をする上で励みになるものがあるとよい
- ・ 楽しみや仲間が増えることをアピールできるとよい
- ・ ボランティアを学ぶ・知る機会を提供する
- ・ ボランティア予備軍が多いので背中を押す仕組みが必要
- ・ 有償ボランティアとは何だろうか？
- ・ 参加しやすくなるようにポイント制度などが必要では？

ボランティアの活動促進

情報発信の環境整備

- ・ 元気なシニアを活用できないか？
- ・ 閉じこもり気味のシニア等を外に出す仕組みがあるとよい
- ・ 退職者セミナーを開催するとそれをきっかけに参加する人が多い
- ・ シニアが輝く地域づくり。居場所をつくりたい
- ・ 地域で世代間の交流が必要ではないか？
- ・ 障害を持つ人を理解するために交流の機会を

シニア等の地域への参加

各団体の相互理解

- ・ 興味のあるテーマについて情報提供があれば、それをきっかけに参加するのではないかな？
- ・ 市民団体等が発信している情報が伝わっていない
- ・ 区民もどこに情報があるのかわからないのではないかな？
- ・ 各機関でよいことをやっているのに伝わっていない

- ・ 地縁型と知縁型（テーマ型）コミュニティでは担い手づくりや活性化の方法が異なるのでは？
- ・ 麻生市民交流館やまゆりには、約600の市民団体が登録されている
- ・ 町内会・自治会では、美化活動、防災訓練など、顔が見える関係づくりを目指して活動している
- ・ 同じ意識を持つ団体同士が連携できる仕組みがあるとよい

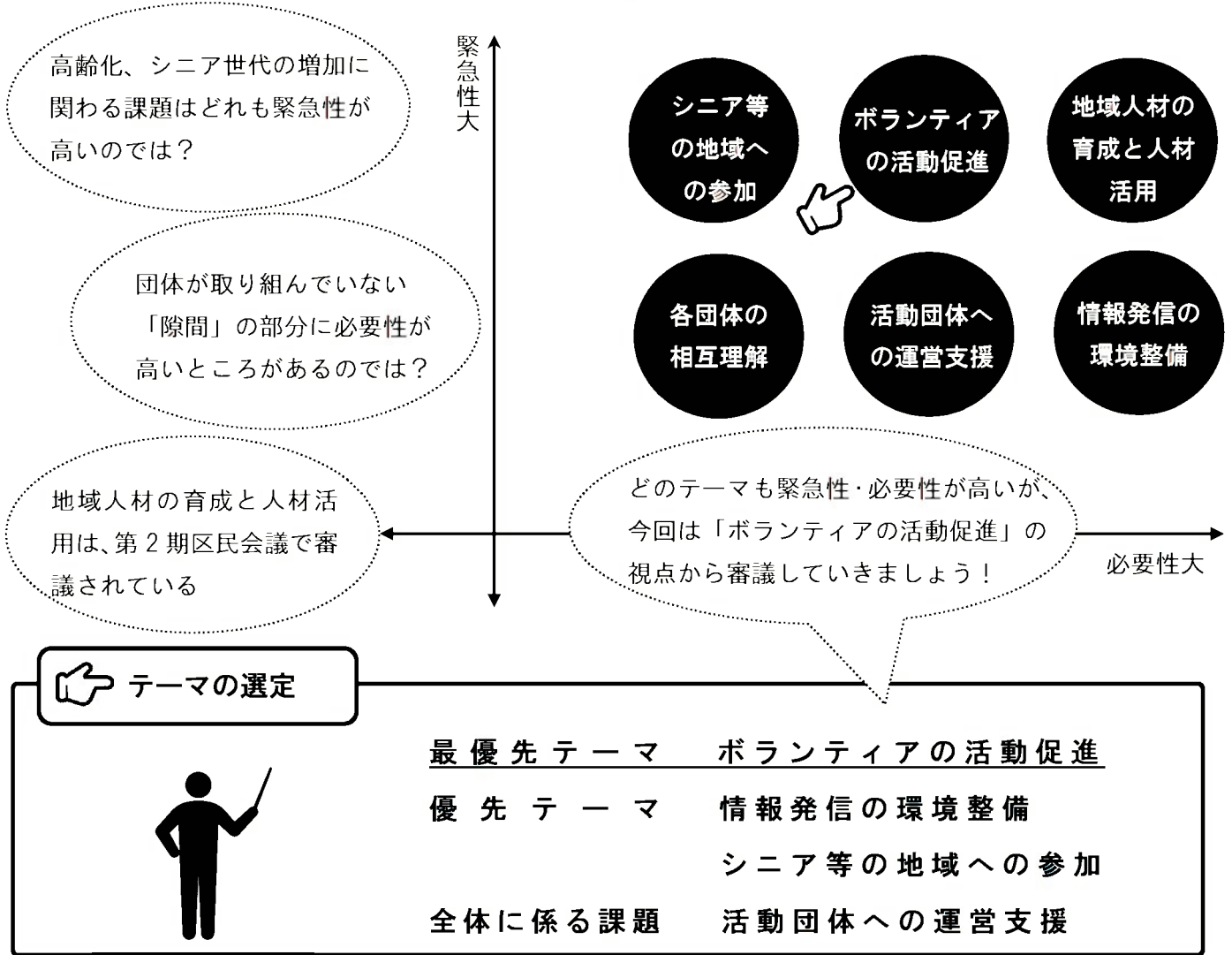
対象を定めて、それに応じて必要となる情報提供や支援を考えたらどうだろうか？

そもそも「市民活動」「地域活動」の言葉は、人によってイメージが異なるのでは？



II テーマの選定

出された意見を6つの項目（方向性）に分け、緊急性と必要性を基準に優先テーマを選定しました。

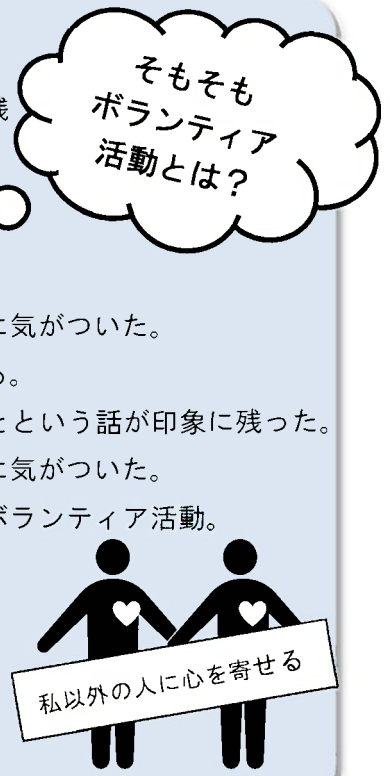


ボランティア活動のイメージの共有

ボランティアを知るため、麻生市民交流館やまゆりで開催された市民活動実践入門講座の一コマ「ボランティア活動とは？」に参加し、ボランティア活動について理解を深めました。

講座に参加して気がついたこと

- 話し合いの中で、ボランティア活動の受けとめかたが人によって異なることに気がついた。
- 報酬の問題ではなく、人との関わり合いを求めたいがために活動する人もいる。
- ボランティアとは、あなたがいるから私がいる、私以外の人に心を寄せることという話が印象に残った。
- ボランティア活動に関わるにあたって、肩ひじを張る必要はないということに気がついた。
- 社会奉仕以外にも色々な形がある。隣の家の玄関先を掃除することも一つのボランティア活動。
- 挨拶など、人と人が心を通わせることが何よりも大切であることを知った。
挨拶がきっかけとなって、行動に移し、その積み重ねによってグループができて、ボランティア活動に発展していくのではないかと。
- 多様な社会の中でも、同じ人間として差別なく理解し暮らすことの重要性がボランティアの根底にあるのだと思う。



Ⅲ 解決策の検討（審議内容）

ボランティアに関する様々な課題や気がついた点について意見を交わし、次の「ボランティアの意識や行動の変化」をまとめました。

ボランティアーの意識や行動の変化



STEP 1 ボランティア活動に関心を持つが、内に籠っている段階

- 定年を迎えたシニア世代の中には、何らかのボランティア活動をしたいと思っている人が多いのではないか。関心のある人に情報を届ける必要がある。
- 学生や主婦、現役世代等も、大きなイベント開催や災害発生をきっかけに、ボランティア活動への関心が高まる。中学生など若い人が活動に参加すると、様々な意見をきくことができ、団体にとっても活動に幅が出る。



STEP 2 何らかのきっかけで一步を踏み出してみる段階

- ボランティア講座、体験学習、短期のボランティア募集、相談窓口、町会役員の輪番制、仲間からの誘い、妻から背中を押されてなど、ボランティア活動に参加する際は、何らかのきっかけがある。
- ボランティア活動に参加しやすい環境という部分では、団体への信頼性や有償という面も一つの目安となる。参加へのハードルを下げるのが大切。



STEP 3 活動のプレイヤーとなり仲間ができ、活動が楽しいと感じる段階

- 短期のボランティア活動を長期的な活動へとつなげる仕組みが必要である。
- ボランティア活動が重荷となって離れていくことも多い。それを防ぐためにも、一緒に活動する仲間や居場所が必要である。
- 楽しいと感じる反面、長期的な人間関係の煩わしさ、ストレスを感じることもある。各個人の性格によるところが大きいですが、乗り越えて続けて欲しい。



STEP 4 やむにやまれず突き動かされる心、自発的な心が芽生える段階

- 楽しいだけのボランティア活動は飽きられる。継続のためには当事者として活動を自分のものにしていく必要がある。何をやりたいのか心から湧きあがるのが大切。そのテーマやきっかけは1人1人異なる。
- 共育（ともいく）という、行う側と受ける側が共に成長するという考え方もある。ボランティアでも、リーダーの影響を受けてプレイヤーは成長する。



STEP 5 活動のリーダー等になり、同じ意識を持つ仲間を集めていく段階

- ボランティア活動はプレイヤーの他にマネジメントを担う人がいて成り立つ。ボランティア活動を続けるためには、「ボランティア性」以外にも「事業性」という団体運営の視点も持つ必要がある。
- 社会的に求められている活動であるが、特定の人への負担が増え、継続が困難に陥る団体もある。団体の相談にのってほしいところが必要である。

※ボランティアの意識や行動の変化を分類したものでSTEP5を目標とするものではありません。

（具体的な審議内容の設定）

市民のボランティアに対する意識を把握するため、川崎市や国が行った様々な調査*を確認しました。

国の実態調査では、情報の不足や活動への信頼性等の様々な要因により、「ボランティアに少しでも関心を持った人は約62%もいるにもかかわらず、過去3年間にボランティア活動経験がある人は約26%しかいない」という結果が出ていました。

そこで、ボランティアを募集する団体とボランティア活動をしたい人との間にミスマッチが発生している現状を考慮し、本部会では「ボランティアの意識や行動の変化」の内、ステップ2（ステップ1から3への過程）を焦点とし、次のとおり、「具体的な審議内容」を設定しました。

※平成25年度 市民自治の実態等に関する調査（川崎市）
平成25年度 川崎市高齢者実態調査（川崎市）
平成26年度 市民の社会貢献に関する実態調査（内閣府）
新たな総合計画に関する市民意識調査（平成27年実施）（川崎市）

👉 具体的な審議内容の設定



ボランティア活動をしたい人や関心のある人が
ボランティア活動への一歩を踏み出せるように
受け取りやすい情報発信の仕方やルートなど
気軽に参加できる仕組みを検討する

（対象の設定）

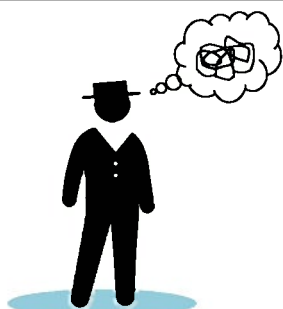
ボランティア活動に気軽に参加できる仕組みを検討する上で、比較的時間に余裕のあるシニア世代をメインに捉えて審議を進めることにしました。

※ただし、地域には、シニア世代以外にも、子育て世代や現役世代、中・高校生等様々な層が存在し、いずれの層も活動の担い手となりうることを、これからの審議でも意識していく必要がある旨、確認しました。

■主な意見

- シニア世代は、自分を高齢者と思いたくないという意識が強い。
- 団塊世代が定年退職を迎え、多くの方がボランティア活動に参加するのでは、という予想が以前にあった。しかし実際は60歳になってすぐに地域に入るといった人は少ない。70歳近くになって入る人が多い。
- 65歳～70歳代は趣味に没頭している方が多いのではないかと。そのような人達にボランティア活動をしたいという気持ちになってもらう仕組みが必要。

👉 対象の設定



何をするでもなく
なんとなく毎日を“もやもや”と過ごしている
シニア世代を想定し
ボランティア活動の参加のきっかけをつくる

(仕組み・仕掛けのイメージ)

「ボランティアの意識や行動の変化」のSTEP 2の過程を5段階^{*}に分け、知る・関心を持つの段階を切り口として、参加への仕組み、仕掛けのイメージを検討しました。

^{*}川崎市シティプロモーション戦略プラン「情報の受け手の段階に応じた情報発信」を参考



■主な意見

- 男性は照れ屋な人が多い。「妻に勧められて」など、背中を押す仕組みが必要となる。
 - ボランティア活動を知ってもらうには、様々な媒体（雑誌、HP、地域情報紙、掲示板、町会の回覧など）の活用が効果的だと思われる。町会の回覧は妻が見る場合が多いので、妻に向けたPRが有効である。
 - 「関心を持つ」以降は個人の価値観に左右されるのではないか。社会のため、余暇のため、健康のため、特技を披露するためなど、人それぞれ理由が考えられる。それぞれにあったアプローチが必要だと思う。
 - シニア世代の関心を寄せるキャッチフレーズとして、「健康寿命」がある。健康寿命を延ばすには、運動や食事が大切といわれてきたが、昨今は社会参加、生きがいや仲間作りも大切な要素になっているようだ。
 - 健康には、「教養」・「教育」ならぬ、「今日、用があること」・「今日、行くところがあること」が大事といわれている。
 - ボランティア活動に絡めて「体」の健康面の他、「心」の健康面も大切であることをシニア世代に伝えたい。
- ▶ 審議の結果、健康に関する区のイベント「麻生区健康づくりのつどい」でブースを開設し、キャッチフレーズとして

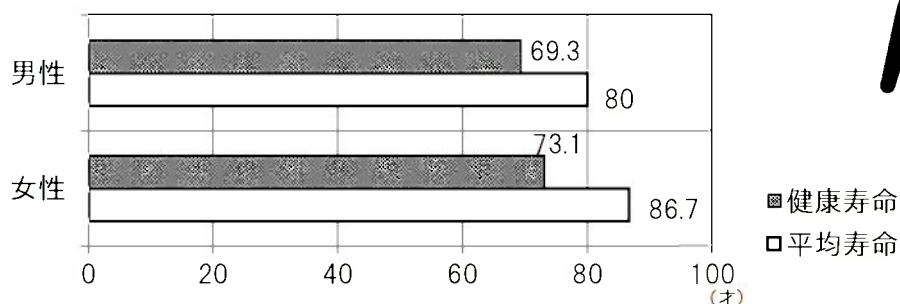
ボランティア活動に参加して健康寿命を延ばしましょう！

を掲げ、そのPR効果を試すとともにボランティア活動について、来場した区民の声を聴いてみることになりました。

Q.健康寿命とは？

健康寿命は、健康上の問題で日常生活が制限されることなく、健康で生活できる期間のことです。平均寿命と健康寿命の差は日常生活に制限のある期間を示しています。川崎市民の平均寿命と健康寿命の差は、男女共に10年以上あり、健康寿命を延ばして、生活の質の低下を防ぐことが求められています。

川崎市の平均寿命と健康寿命



※かわさきいきいき長寿プラン（平成27～29年度）参照

（区民との意見交換の実施）

麻生区健康づくりのつどいで区民会議ブースを開設し、ボランティア活動について、来場者と意見を交わしました。聞き取りの際は「ボランティア活動」という言葉の範囲はあえて定義せず、来場者自身のイメージで自由にボランティアについて話をして頂きました。



日 時 平成27年10月31日
午前10時～午後3時
場 所 区役所前広場
健康づくりのつどい会場内
回答者 127人
男性45人 女性82人



麻生老人福祉センターへの現地調査

- 平成27年9月10日、委員4名が「麻生老人福祉センター」を訪問し、施設管理者に対してヒアリングを実施しました。

目的 施設利用者がボランティア活動に興味を持ちやすい環境であるかどうかを把握し、利用者をボランティア活動へ促す方法を探る。

結果 利用者はスポーツや講座等、何らかの目的を持って施設を訪れているので、他のこと（ボランティア活動）に関心が向きにくい環境であるが、ボランティア活動の魅力や、ボランティアを必要としている団体、相談窓口等の情報を提供することで、利用者の関心を引くきっかけになりうる。

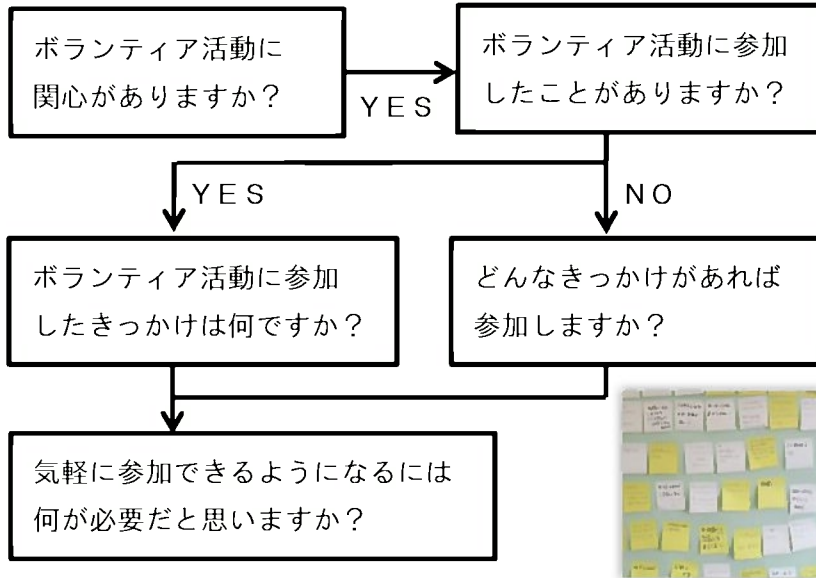
今回の現地調査が契機となり、区民会議委員の働きかけで、市民活動のチラシ（麻生市民交流館やまゆり発行）を麻生老人福祉センターに配架する取組が始まりました。



多くのシニア世代・高齢の方が集まる麻生老人福祉センター

詳細な調査結果は資料編P●

質問方法



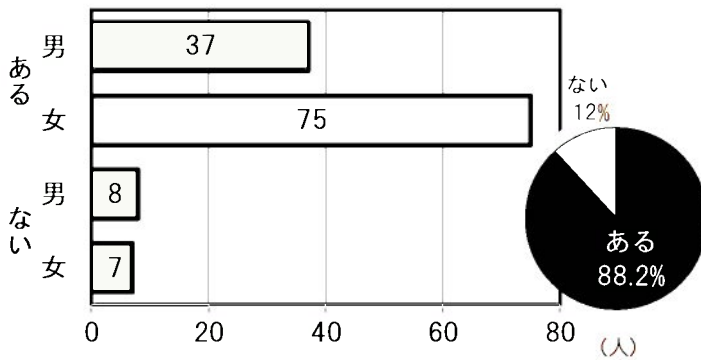
前半の質問では YESかNOかを聞き、ボードにシールを貼りました。シールの色で、男女を分け、数を把握しました。

後半の質問では、参加者から自由に意見を聴いて、ポストイットに書き込みました。ボードにポストイットを貼り、他の参加者の意見を見ることができるようになりました。

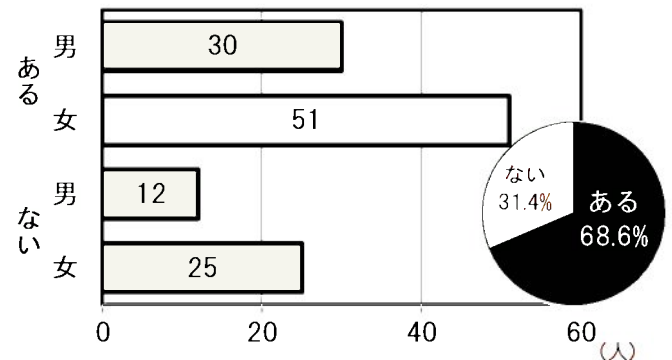


区民の声

Q 1. ボランティア活動に関心がありますか？



Q 2. ボランティア活動に参加したことがありますか？



Q 3. ボランティア活動に参加したきっかけは何ですか？

- ・ 友人に誘われた、お願いされたから
- ・ ボランティア団体に友人・知人がいたから
- ・ 活動に関する情報を見て、おもしろそうだったから
- ・ そもそも興味がある活動だったから
- ・ 講座・体験等を受けて、参加したいと思ったから
- ・ 広く受け入れる活動（震災ボランティア等）だから
- ・ 時間ができたから

Q 4. どんなきっかけがあれば参加しますか？

- ・ 友人・知人に誘われれば（入っていれば）参加したい
- ・ 時間ができれば、体調が良くなれば参加したい
- ・ 様々な活動内容の情報が入れば参加したい
- ・ 自分にできることがあれば参加したい
- ・ 興味があれば、気に入ったものがあれば参加したい
- ・ 新しい出会いがあれば参加したい
- ・ 講座・勉強会等があれば参加したい

Q 5. 気軽に参加できるようになるには何が必要だと思いますか？

- ・ ボランティアに関する情報を得られやすくする必要がある
- ・ きっかけや、背中を押す仕組みが必要である
- ・ 自分の能力を活かせる活動があるということを分かりやすく示す必要がある
- ・ 活動の時間にあまり縛られないようにする必要がある
- ・ ボランティアについて相談できる場所があるとよい
- ・ 人間関係等の問題に関わらないようにしたい
- ・ みんなで活動する楽しさをPRする必要がある

下線部は特に多かった意見です



詳細な調査結果は資料編P●

意見交換を終えて・・・



- ・情報が必要との意見が多かった。発行されているボランティア関連の冊子が知られていないと感じた。
- ・友達に誘われたら参加するという声が多かった。仲間作りがボランティアにつながることを実感した。
- ・健康寿命のキャッチフレーズに共感してくれた人が多かった。
- ・定年になったら趣味やボランティアを考えたいと話す人が多かった。
- ・ボランティア活動をしていないと回答しているのに、よく聞くと様々な活動をしている方がいた。ボランティアとは何だろうと、改めて疑問に思った。
- ・女性の回答者で、夫が既に活動しているが、自分は働いているので定年後に探したいとの意見もあった。今まで、定年を迎え、家に籠っている男性をイメージして審議を進めていたが、必ずしもそのようなケースだけではないことがわかった。
- ・身近な場所よりも、自宅とは少し離れた場所で活動したいという話もあった。
- ・東京オリンピックのボランティア活動に参加したいとの声が多かった。
- ・話が弾んで、自分が取り組んでいる活動について、話が止まらなくなる回答者もいた。

(提言の方向性)

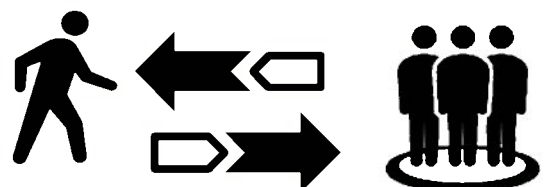
意見交換を踏まえて、どのような方向性で提言をまとめていくのかを検討しました。

■主な意見

- 参加への「あと一押し」が重要。それが「友人や知人の誘い」なのかもしれない。
- 地域に友人等がいるという前提での話なので、地域内に友人等が少ない人（特に男性の場合）に対しては別の仕掛けが必要ではないか。
- 話を聞くとボランティア活動を始めようと思いつききっかけは、人それぞれで異なる。その一歩を踏み出す人のストーリーづくりに協力したい。何かしらの特技があると教えたという気持ちから外に出る。
- 団体には入りたくないが、単発のイベント型のボランティア活動ならばやりたいと思う人もいる。
- 単発と長期的に活動が必要なボランティアは性質が異なるので分けて考える必要があるが、踏み出す人にとってはメニューの違いに過ぎないのではないか。
- 次のステップに繋がる講座があちこちにあるとよい。まだまだ活躍できる場があると思わせるような仕掛けが必要だと思う。
- そもそもボランティアが増えることは豊かな地域社会を築くという前提があってこそその話。そのことをまず周知することが大切。ボランティア活動は一石五鳥といってもいいほどの価値がある。
- ボランティア情報が欲しい人に対して、メール配信で情報が送られる仕組みがあると入りやすい。
- 意見交換の際も情報発信があれば参加するという話が多かったが、現在も既に様々な媒体で発信はされている。団体が出している情報が、受け手の区民に十分に届いていない現状がある。
- 一方で団体側もボランティアがほしいと思っているところは多い。しかし、どのように集めたらいいのかわからない。団体も相談する場所が必要である。

👉 提言の方向性

ボランティア活動へ一歩を踏み出したい人
ボランティアを集めたい団体
その双方からの 流れをよくする



「流れをよくする」イメージ

地域社会全体にボランティアについての意識が浸透している。

流れ① 効果的な情報発信

(団体 → 区民)

例：大量に発信されている現状のボランティア関連情報を一元的に管理し、ボランティア活動に関心のある人に向けて効果的に発信されている。

流れ② 参加への一押し

(区民 → 団体)

例：ボランティア活動に興味を持つ人に対し、参加に向けての一步を支援する講座等、背中を押す仕組みがあり、シニア世代等の地域デビューの支援体制が整っている。

①と②が上手く組み合わせたり、ボランティア活動に参加したい人とボランティアを集めたい団体とのマッチングが円滑に進んでいる。

世田谷ボランティアセンターへの視察

委員 6 名が社会福祉法人世田谷ボランティア協会が運営する世田谷ボランティアセンターに訪問し、ボランティア相談担当の職員から話を伺いました。

目的 30 年を超えるボランティアセンターの運営から、提言に向けてのヒントを学ぶため

結果 ・ボランティアセンターと 3 カ所の地域の拠点（ビューロー）で、バザーの収益金や寄付金などの自主財源と地域のネットワークを活用し、ボランティア活動に関する事業を定着させている。

- ・相談窓口の他、人と団体を繋げる仕組みの「おたがいさまbank」等の運営や、情報誌「セボネ」を発行している。
- ・それぞれの施設に相談窓口があり、ボランティアコーディネーター（職員）が相談に応じている。コーディネーターは原則として面談により、一人ひとりにあった活動や団体の紹介に努めている。また、勤め人や学生も利用できるように、ボランティアセンターでは平日（一部）の夜間も窓口を開いている。

感想 ・世田谷区はボランティアが生活の中に溶け込んでいるようだ。ボランティアセンターに行けばやりたいことが見つかる環境が整っている。

詳細な調査結果は資料編 P ●

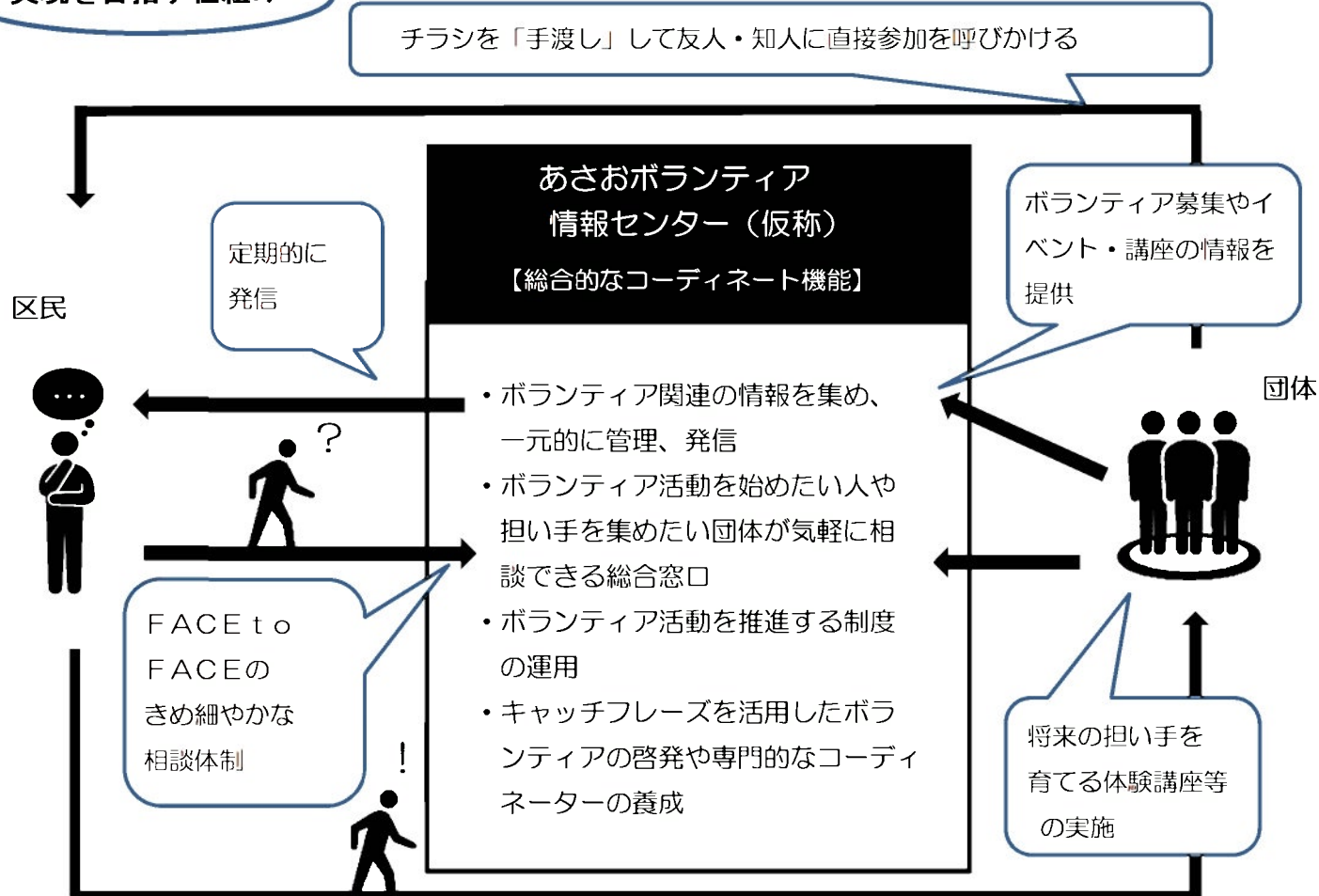


地域の拠点となっている世田谷ボランティアセンター

(提言内容の検討)

ボランティア意識が浸透している社会では、ボランティア活動に参加することも、また、ボランティアを受けることも、身近に感じる環境が生まれています。そこでは区民の誰もが、ボランティア活動に気軽に参加できる仕組みが整っているものと思われます。

実現を目指す仕組み



区民会議フォーラム「健康寿命を延ばすには？」の開催

平成28年2月21日、区民にボランティアに目を向けてもらうことを目的として、「健康寿命を延ばすには？」をテーマに区民会議フォーラムを開催しました。

東京都健康長寿医療センター研究所の藤原佳典氏から、シニア世代が地域とのつながりの中で楽しく健康に暮らすためのヒントを伺いました。部会の活動としても当日はパネルの展示や相談窓口のチラシの配布を行いました。

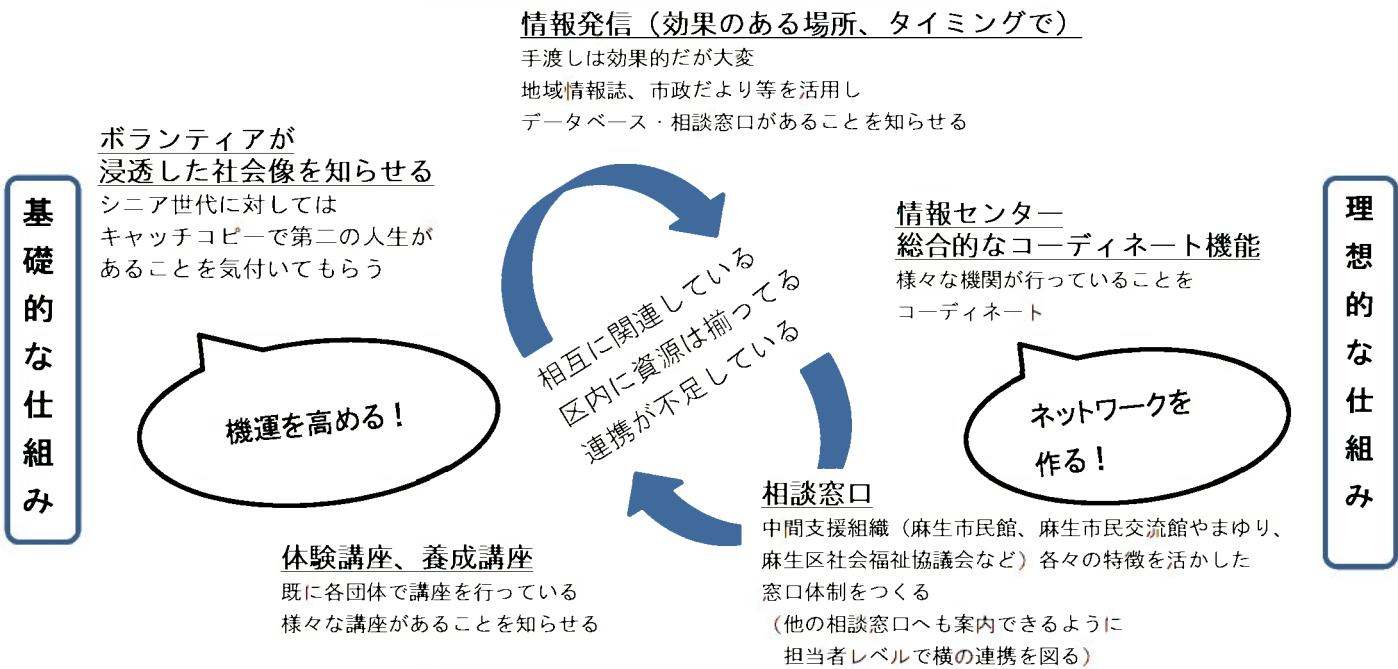
アンケート結果から推測すると、約35名の方がボランティアをしたことがないとの回答でした。更に、ボランティア活動の参加経験の有無を男女別に分析したところ、女性で参加したことがあると答えた方は48.6%であったのに対し、男性の方は40.6%でした。(全体は45.1%)

今まで参加したことのない方々(特に男性の方)にとって、今回のフォーラムが「ボランティア活動への一歩」につながる機会となりましたら幸いです。

(詳細な結果は〇ページ参照)

理想的な仕組みの構築に向けて、どのような機能が必要なのか、具体的にアイデアを出し合いました。アイデア出しの際には、縦軸に「効果的な情報発信 — 参加への一押し」、横軸に「基礎的な仕組み — 理想的な仕組み」をとり、大まかなグループ分けをし、提言の組み立てを検討しました。

効果的な情報発信（団体からの視点）



参加への一押し（区民からの視点）

アイデア出しをしたところ、まず先に取り組むべき部分は「ボランティアが浸透した社会像」を伝えること、提言の最終目標は「あさおボランティア情報センター（仮称）」であることを改めて確認しました。またボランティアの推進に向けて、既に区内にある多くの存在が、十分に知られていないことに気がつきました。

そこで、知られていない活動や組織、制度、地域資源等を、どのように伝え、どのように組み合わせ、どのように「つながり」をもたせるのかという視点を提言の中に入れることにしました。

ボランティア活動に関わる麻生区内の多くの存在



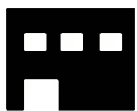
区民

- 例えば
- ・ボランティアに関心があるが、参加に躊躇している区民
 - ・何をしてもなくなんとなく毎日を“もやもや”と過ごしているシニア世代
 - ・区内各地で市民団体や地域団体取材している区民記者
- 約17万5000の方が区内に住んでいる。更に在勤、在学の方もいる



団体

- 例えば
- ・麻生市民館や麻生市民交流館やまゆり、学校等、各施設で活動している市民団体
 - ・暮らしやすい地域づくりを進めている町会・自治会
 - ・里山フォーラムや社会福祉協議会等、各分野に関係する団体など
- 様々な分野で、様々な場所で、様々な団体が多様な活動をしている



機関・施設

- 例えば
- ・麻生市民館、麻生市民交流館やまゆり、麻生区社会福祉協議会の相談窓口
 - ・区役所や道路公園センター、地域みまもり支援センター等の行政機関
 - ・いこいの家や老人福祉センター、スポーツセンター、図書館など
- 直接、間接的にせよ、ボランティアに関わる機関、施設は多数ある